

小豆島町内海地区で釣りのルールづくりや水産資源回復に取り組む同地区漁場利用協定協議会（UFC）などは12日、加入者が支払う協力金で購入したマダイやキジハタ（アコウ）の稚魚を対象海域に放流した。7月に協定制度をスタートしてから初めての放流で、漁業者と釣り愛好者が手を携えて豊かな漁場をつくる一歩を踏み出した。

# 小豆島を豊かな漁場に

漁場利用協定は、マダイから、内海漁協や県内外の好漁場の同地区を訪れる遊漁者3団体が7月に締結釣り愛好家と漁師のトラブした。遊漁に一定の制約をルが長年の懸案だったこと設けるとともに、稚魚放流



船上からマダイなどの稚魚を放流する参加者―小豆島町

## 内海漁場協定協 初の稚魚放流

に充てる資金を加入者から徴収する仕組みで、同様の協定は全国で初めて。

UFCによると、制度開始後に新たに岡山の3団体と調印。加入者は400人を超え、加入を検討する人からの問い合わせも相次いでいるという。

今回の放流はUFCと、協定を結ぶNPO法人瀬戸内遊漁船釣り団体協議会（事務局・善通寺市）が合同で実施。両団体が計約60万円を出し、体長20センチ程度のマダイ約5千匹と6センチ程度のキジハタ約700匹を用意した。加入者約50人が小豆島町の坂手港に集まり、それぞれの船で近海に出て「大きくなれよ」と願いながら放流した。

UFC会長の森勝典内海漁協組合長は「予想を上回る大勢の人が賛同してくれている」と喜び、「放流を続け、どこにも負けない漁場にしていきたい」と話した。